

特集 戦後日本は何処へ

清水幾太郎と戦後思想

常に時代を先取りする清水氏の思想の展開は内面の振幅なのか、それとも転向なのか。これを問うことはジャーナリズムの責任を問うことでもある

安田 武ヤシタケシ
中嶋 嶺雄ミナトカ
(評論家)
(東京外国語大学助教授・中国研究)

編集部 ちょうど戦後三十年というこの時期に、清水幾太郎さんが戦後『中央公論』に書いたものをまとめた二冊の評論集『日本人の突破口』と『無思想時代の思想』が小社から出ました。それと前後して安田さんが「思想者の責任」という名エッセイを『東京新聞』に書かれて、清水さんの思想的責任あるいは転向の問題を論じられた。そうしますと『中央公論』本誌としても、清水さんとともに歩んできた編集責任、あるいは掲載責任があつて、他人ごととしてこれをさばくことはできないわけなんです。

戦争中は戦争中で、「近代の超克」と並んで有名な「世界的立場と日本」という大シ

ンポジウムを、ちょうど太平洋戦争が始まる直前から、始まる時期にかけて本誌は掲載している。参加した京都学派の人たちは、戦争責任を問われて、京大を去られたわけですが、けれども、そういう知識人の戦争責任を最大限追及したのが、戦後の清水先生などを含めた知識人であつたと思うんですね。『中央公論』は京都学派の論調を掲載し、また戦後は清水さんのエッセイを掲載している。その後、清水さんの論調は、六〇年を機として、大きく変わってきている。いったい雑誌の営み、編集の責任というのはどこにあるんだろうかという点も、私も考えざるを得ない。同時に安田さんや中嶋さんも、本誌の寄稿者で

いらっしゃるわけで、安田さんの場合は、かつて清水さんに私淑しておられた。また中嶋さんも、六〇年安保以降清水さんと一体に歩まれた点があると思います。それぞれの立場から、戦後思想についてお話ししていただけたらと思います。

中嶋 ぼくは、六〇年安保を通して清水さんを知ったわけですが安田さんはいつごろからですか。

安田 年代で申し上げれば、昭和十三年か十四年ごろじゃないでしょうか。たぶんぼくが中学の四年生か五年生ごろですね。

そのころね、『朝日』のコラム欄ですが、清水幾太郎、小林秀雄、豊島与志雄、中島健



安田 武氏



中嶋嶺雄氏

蔵という人たちが、「騎兵」という欄に、名前を出して書いていたんですね。それは、あの当時の暗い状況の中でぼくらや早熟な中学生にとって抵抗の拠点みたいな気がしていたわけね。清水さんも、そのころ『朝日新聞』学芸部の嘱託だったので書いていたわけです。それから戦前の『知性』『中央公論』なんかに清水さんが書かれるものを読んで、

非常に励まされていたわけです。いま、ぼくのところに未知の青年が手紙よこしたり、突然訪ねてきたりするんですけども、ぼくもまさにそれと同じで、手紙を出して、清水さんのほうから遊びにこないかということになった。だから非常に長いんです、つき合いは。中嶋 安田さんの『東京新聞』拜見しました。安田さんは、清水さんには非常に共感するものがありながら、やがて六〇年安保以降ズレていくところがある。安田さん自身、ある意味での後期戦中派というんでしょうか、つまり八月十五日というものを非常に重視していらっしゃって、それとの距離がだんだん隔たっていくところに、安田さんの手続きという問題が出てくる。その手続きというのは、六〇年安保を境として変わったと言われている清水さんが、あの時期に何らかのマニフェストなり、自己批判なりをすべきであった、もししていれば、いまの清水さんの立場はそれなりに擁護できるということなのでしょう。安田 六〇年安保以後、清水さんが変わってくる。それに対して転向したという決めつけ方がずいぶんありましたね。特に今日出海氏

とか、竹山道雄氏なんか、そういうことを『自由』に書いて、それに対して林健太郎氏が、そうじゃないんだ、いまこそ本来の清水幾太郎に戻ったんだということを言った。きょうの座談会のために、改めて中央公論社の二冊の本を全部読み直したんですけれども、ほとんど変わってない、転向したという言い方は違うと思うんです。清水さんのこういう傾向は清水さんの思想を丹念に見ていくと、すでに戦前にも出ていたし、戦後早い時期にも出ています。イデオロギーとしての立場が重くなればなるほど、あたかも転向したかのごとくいわれるわけですけども、清水さんの内面に沿ってみれば、すでに戦前から何度も繰り返されてきた振幅というか、動揺というか、そういうものでしかありません。

ぼくが手続きの問題を『東京新聞』で言ったのは、天皇論と戦後の教育についてです。

中嶋 安田さんにとっては、天皇論なり、教育勅語をめぐる論文は、非常に衝撃であったというわけですね。

安田 いま言いました清水さん自身の振幅について、もうちょっと申しますと、一番最初清水さんの中のものすごい合理主義です。

科学の方法に対する信頼と言ってもいいわけですが、清水さんは「主体性の客観的考察」という文章を書いた。その中で、主体性を唱える連中は、唱えているうちに主体がいつの間にか主観に切り換って行く。他方主体性を否定する側の連中は、マルクス主義を含めて、科学を教条化してしまふ。主体性論者は主体性というものを実体化し、マルキストのほうは一種の教条主義から理論というものを実体化してしまふ。それはどちらもダメなんだと言っているわけですね。だから清水さんの中には、人間存在に大きくかぶさってくる実体化されたものに対する抵抗感が、ずっと一貫してあったと思うんですよ。天皇制が暗い実体であったときには天皇制に対する抵抗だったし、家族制度を含む共同体社会の実体化というものに対しても非常に抵抗してきた。

あとで、林健太郎さんが、あれが本来の清水さんだと言ったのは、まさにそのことを指しているんだらうと思うんです。少なくとも平和問題談話会から、内灘、砂川までの清水さんは、平和というものを実体化して論じていた。実体化というのは、本来の清水じゃな

いという林さんの批評は、その意味で当たっていると思うんですね。

もう一つの清水さんは、この本でいえば、「見落とされた多数」に出てくる。ここで清水さんは、技術革新や経済成長の結果が、生物としての人間の条件を破壊すると言っている。人間の生物的境界が見えてきたと言うわけですね。だけど、これも清水さんのテーマとしては、戦前から出ているんですね。一方に科学による合理化、客観化があると同時に、他方に、ついに外部化できない、科学を拒否している生物としての人間の暗さというものがあるわけです。戦前「深淵から」という論文が『中央公論』にあり、それから岩波の『思想』に昭和十八年に書いた「現実の再建」という論文がある。そこでは、そういう外部化、客観化を拒否する生物的な人間の暗さというものを言っているわけです。

中嶋 そうすると、天皇論、教育勅語で変わったというのをもう少し説明していただくとどういうことになりますか。

安田 それはイデオロギーの面でごく簡単に言ってしまうえば、昭和二十八年六月の『思想』に「占領下の天皇制」というのを書いて

いて、それとこんどの天皇論と比較すれば、これはだれの目から見ても百八十度の転向ではない。これは事実ですね。

もう一つは、「新しい歴史観への出発」ね。日本の産業近代化、工業近代化によって必然的に生み出されてきた大衆という問題をあそこまで突き詰めて、そういう大衆が出てきたということは、近代化の必然性というふうにとらえていたはずの清水さんが、突如として教育勅語でそういう人間たちを教育しなきゃいかんというのは、これは清水理論の破産じゃないかという感じですね。

転換か内面の振幅か

中嶋 安田さんの言われる点は、たいへん明快にわかったんですけども、ぼくらは、清水さんの六〇年安保以前のものはほとんど読んでなかった世代だと言ってもいいんですよ。そういうわたくしなどからしますと、清水さんは六〇年安保を契機に、非常に大きく変ったと思えるんですね。つまりあのあと、清水さんはかなりの期間ジャーナリズムから離れ、いわば書齋に沈潜されましたね。その沈潜される過程で、『現代思想』を書き『倫

理学ノート』を書いた。あの時代に『現代思想』を書き『倫理学ノート』を書いたこと自体が、まさに清水幾太郎なりの手続きのとり方ではなかったか。若干弁護論になりますけれども、そういう気がするわけです。

というのは、先ほど安田さんがおっしゃった科学という問題。それまでの清水さんにとつては、科学といえはやはり十九世紀の大思想、あるいはマルクス主義と言った問題が、大きな抵抗することのできない体系として、彼の内部に存在してきた。清水さん自身はマルクス主義者ではなく、いわばラディカル・プラグマティストであり経験主義者であったと思うのですが、その彼が安保の挫折体験を通して『倫理学ノート』などに沈潜することによって、大きな体系の科学ではなくて、もっと軽いものとしての科学が、多面的に存在しているのではないかということを感じたと思うんですね。デカルトにたいしてヴィーコに着目し、成長や欲望の問題を吸収し得る経済学に眼を開いていったのは、まさにこの点からでしょう。それから彼はオルテガ・イ・ガセットを取り上げて、「貴族」が「大衆」をリードするという考えは、「貴族」の特

権であり、「大衆」と離れたところに存在したものでなかったかというふうに、考えますね。そこで一番の問題は天皇制の問題ですが、天皇制は許すべからざるものだというのは、科学とか大原則ではなく、大衆の側にとってみてもそうであろうか。教育勅語にしても、そこに出ている道徳律は、ある意味で普遍性を持ち得るのではないか。これは清水さんの中にあつた科学なり、イデオロギーなりの神話が、六〇年安保を契機にがたがたと崩れていったということ、その崩れていった中で気がついてみたら、安田さんがおっしゃったような生物的な人間の暗さではなくて、もっと当たり前の人間存在がある。天皇制についても、いかなるときも世論調査でも天皇制を支持しているのが大衆であるのに、インテリがそれを批判する資格があるのかという発想に変わってきますね。これは清水さん自身が大きな転換を遂げたのだとぼくは考えるんです。それはまさに転向であり、しかも清水さんは、後に転向は価値観としても認められるべきだとおっしゃっていますからね。

こういふ時期を通して清水さん自身、知的

な手続きを研究室の中で『現代思想』なり『倫理学ノート』を書くことによって、遂げ

たというふうに見ることができているのではないかと思っています。そうしますと、意外に清水さんというのはわかってくるのではないかと。安田 いま中嶋さんはもつぱら六〇年安保以後の問題でおっしゃったけれども、戦前のことでは、そもそもオーギュスト・コントを卒論に書いているわけですね。十九世紀大科学ですね。と同時に、他方ではジンメルなんですよね。ジンメルの『断想』を岩波文庫で訳しているわけですね。だから、いまおっしゃったことは、すでに戦前の清水さんの中に、ジンメルという形で出ていたわけです。それから、戦後早い時期も、さっきの「主体性の客観的考察」のような、科学的方法というものを無限に広げていくことに価値があるということ、一方で大科学とまったく関係のない「庶民」とか「匿名の思想」という論文がありますね。インテリはいつだって有名の思想だけを問題にしているけれども、そんなものは庶民に関係ないんじゃないか、庶民を支えているのは常に匿名の思想ではないかという発想が、戦後にもあるわけです。

「そういうふうにとらえれば、何も六〇年安保の体験を通して、それから十年間沈黙して、『現代思想』や『倫理学ノート』を書いて、そこで天皇制という広い通りへ出てきたというんじやなくて、彼の内面にそれはすでにドラマチックにあるわけです。そうすると、やはり「占領下の天皇」を書いた当時の清水さんが、それに対して無自覚であって、いまになって、何回投票しても天皇制というものは庶民に支持されただというふうに言うるとすれば、二十六年当時に「占領下の天皇」を書いたことにどうけじめをつけていくのか。ぼくが問題にするのはそこです。

中嶋 なるほどね。わたくしが読んだ限りでは、清水さんは天皇制問題について、従来どっかで感じていながらも認めたくない、インテリとしては少なくとも認めるべきでないことを、非常に素直にあそこで認めた。現代の天皇制に対する現実追認ですね。そうしますと、安田さんがそこで手続き論を出す立脚点は、どういうふうに理解したいいんでしょうか。つまり清水さんの中にはそういうものが戦前からずっとあったんだ、それが天皇論なり教育勅語というもので出たけれども、そ

れは一貫性があったということからすると、あえて手続き論を出しになったことの意味は、どういうことでしょうか。

リーダーを選ぶ側の責任

安田 たえば二十六年に「占領下の天皇」という論文を書いてなければ、あまり問題にならないんじやないですか。あの論文だけじゃなく、天皇制というものと対決することだけが、日本の平和と憲法を護る、そして八月十五日のつらい国民的な体験を護る唯一の道だということを説き続けてきたわけですね。それがいまになって考えてみると、そうではなかった、わたしは従来そう思っていたけれども、庶民の重みはこうあったということをはっきり言うてくれば、それはそれでぼくは納得するわけです。

少なくとも全面講和問題から、内灘、砂川問題、六〇年安保まで、清水発言に衝き動かされた青年の数は、ものすごいわけでしょう。清水さんはそれだけの大きな影響力を持っていたわけですよ。だから、清水幾太郎の言葉に励まされ、そこから行動を開始して人生を始めた若者たちに対する責任は、言論者

としてやっぱりとらなければいけないんじゃないか。おそらく清水さんにしてみれば、当時の清水幾太郎を選んだ各自の責任であって、おれはそこまで責任負わんと言うだろうと思うし、そういう面はあると思いますよ。恋愛と同じで、惚れたやつのはうが悪いんだということがあるからね。(笑) ぼく自身が、かつて清水さんに私淑したということに対しては、それはぼく自身の責任だと思っから、恨みがましい気持はぜんぜんないわけです。

中嶋 いまいみじくも安田さん個人が清水さんに私淑したことの責任という言葉をお出しになったんですけれども、もしも安田さんのような立場をおとりになるとすれば、つまり清水さんの天皇論というのは、むしろ戦後の時期に書かれたときにある意味での虚偽があったのであって、底にはむしろ一貫性があったというふうには、いまになって認めることができるかとすれば、それはむしろ清水幾太郎の責任ということよりも、日本のジャーナリズムあるいはインテリそのものが清水幾太郎を常にオビニオン・リーダーとしてきたことの責任という……。

安田 中央公論社を含めてね。(笑) もちろん

それはありますよ。だけど、少なくとも世論をリードする立場にあった人の責任は、それでは半分は解消しないと思いますね。中嶋さんやぼくもいろいろ書いてますけれども、あゝのときの状況だからこう言ったのであって、いまになってみればそうじゃないということ、十年先、二十年先に言ったとしたら、いまぼくらが発言していることに對する責任は、いったいどうなりますか。

中嶋 わたしみたいに中国研究をやっていると、常に責任をとらされてましてね。もしこの見通しが間違っていたら、いつ筆を折ることになるかもしれないという臨場感で仕事をせざるを得ない。(笑) ただ清水さんの場合、常にオビニオン・リーダーであり得た。今日でもそうである。むしろ、日本社会の実態が、清水さんの責任というふうなものを通り越したところで、まさに清水さんが言うような方向に、追隨してきているという問題があると思うんですね。

安田 そうですね。だから現在の清水さんに對して、率直に言うると二つの考えがあるわけです。

一つは、責任の問題からいうと、一將功成

って万骨枯るといふ考えがありますね。つまりまさにおっしゃったとおり、常にオビニオン・リーダーとして存在し続けたというところの裏では、万骨が枯れているわけです。

もう一つは、清水さん自身が実に悲劇的な人だったという感じですね。それは清水さんに対するぼくの愛情かもしれませぬ。これほど近代日本の悲劇を、人間として背負って生きた人はいないんじやないかという気持があります。ぼくが『東京新聞』の最後に「晩節」という古くさい言葉を用いたのは、ぼくの清水さんに対するある種の断ち切れない愛情みたいなものですね。もう功成り名を遂げたんだから、静かに晩年を送ってくださいという気持があるわけですよ。学者としてもジャーナリストとしても日本の昭和史に足跡を残したんだから、今さら教育勅語なんか持ち出して何かすることないんじやないかという……。

中嶋 そのへんはぼくは少し違いましたね。清水さんはあの年になられても、つねに未来を先取りすべく文献を渉獵し、研究をつづけている。しかも彼自身は意外に傷つきやすい。『現代思想』の中で、「インテリとらうのは傷つきやすいものだ、これに對して官僚とい

うのはまったく傷つくことのない人種だ」といつてますね。清水さん自身はいろいろな展開の中で、そのつど傷つき、さっきも言ったような沈潜があつて、今日まで来ている。これはインテリとしての免罪符になるのではなにか。知識人というのは、自分の言論に対する責任もさることながら、どういう見通しを持てるかということがたいへん重要なことだと思っらんです。この点で清水さんは常に先取りしている。安田さんは晩節を全うしてほしというけれども、そうではなくて、最後までオビニオン・リーダーであつてもらいたいという気持は出てきませぬか。それをどう解釈するかは、われわれ自身の問題だと思っらんです。

安田 それはそうです。「一將功成り万骨枯る」といいたけれど、万骨は所詮万骨なんであつて、清水さんにもおそらくそういう考え方はあるだろうと思っます。

中嶋 その責任ということからすると、清水さんていうのは、ある意味でのアジテーターなんですね。

安田 ある意味でじゃなくて、すべての意味においてアジテーターです。

中嶋 そうしますと、そういうアジテーターである清水幾太郎を、十分自分なりに対象化し得なかつた大衆なり、社会なり、ジャーナリズムなりにむしろ責任がある……。

安田 その問題でね、戦前に清水さんが教育と宣伝とは同じだということをやっているんですよ。なぜ同じかという点、言語や象徴を用いて、人を望ましい方向に導く技術という点で同じだということですね。ただ違うのは、教育はすでに一般に承認された既存の価値に向かつて人を動かす。宣伝は、社会的な承認を受けていない新しい未知に向かつて人を動かすんだと言うわけです。だから清水さんのアジテーションというのは、ものすごく計算づくだと思えますね。デマゴギーは、決してマイナス価値じゃないという認識をはっきり持つてると思えますね。

社会主義の神話

編集部 安田さんの戦中派というモチーフからすれば天皇制が問題だけれども、もう一つ、社会主義の問題がありますね。六〇年安保は、むしろ天皇制の問題より社会主義の問題にかかわっていたような気がするんです。

『現代思想』を読みまして、あのとおりだと思うけれども、清水さんのように三〇年代のヨーロッパに詳しい方が、何で安保を経過しなければあれをお書きにならなかったか。

五〇年代の問題、戦後のスタートというのは、社会主義の問題だけじゃなくて、いろんな可能性を含んでるわけですね。それが六〇年代で、単純化されてしまった面がある。そういう意味で、敗戦から五〇年代というのは大事にしたいという気持があるんです。清水さんは社会主義の問題について、六〇年安保以後に『現代思想』という形で一つの答えを出したけれども、それ以前においては前衛政党的イメージがあるわけです。戦後の共産党には後光がさしてたわけですね。節操が固かった、牢獄の中のコミニズム、無数の犠牲者を出して、共産党活動に殉じていった先輩を、かなり見ているわけですね。そういうものとともにあった五〇年代の社会主義がシンボリックに現れているのは丸山眞男さんの「ある自由主義者への手紙」と、鶴見俊輔さんの「自由主義者の試金石」ですね。どちらも反共リベラリスト批判をやっている。自由主義の神髄は、コミニズムとの合作という路

線でしか貫けない。そこに戦後日本で、自由主義者の生きる道があるんだということを強く言ってるわけです。清水さんご自身が、そういうふうに書かれたのは……。

安田 それは昭和二十五年、『朝日評論』の「運命の岐路に立ちて」ですよ。
編集部 リベラリストとコミニストの合作というのは三〇年代の人民戦線以後ですね、それが全面講和から、六〇年安保に行く大きな筋だったという気がするんです。

そのあとで清水さんは、三〇年代のヨーロッパ人民戦線の無残な敗北を歴史的経験だけではなくて、思想的な論理として問い詰めた。五〇年代の問題は、単に社会主義だけじゃないと思えますけど、一つの大きな筋として社会主義があつたのは間違いない。

そこで中嶋さんにも伺いたいんですけども、六〇年安保に参加した人たちには、安保反対だけではなくて、社会主義あるいは社会主義革命の問題があつたと思うんですね、そのへんをお聞きしたいんです。

中嶋 いまおっしゃったように、『現代思想』は、むしろ三〇年代論だ。清水さんほどのヨーロッパのインテレクチュアリズムについて

認識の深かった人が、なぜ六〇年安保以降になつて、初めてあれが書かれたかという問題ですが、まさに、清水さんは六〇年安保を通過しなければ、三〇年代の問題をああいいうふうには論じなかつたんだらうと思うんです。

それは清水さんのみならず、日本の五〇年代のリベラリズムというものが社会主義に対して寛容なりベラリズムだったんですね。平和運動も中国、ソ連というような社会主義に対する神話があつて、それにもとずいた平和運動だったと思うんですね。それが清水さんの場合に崩れていく第一歩は、やっぱりハンガリー事件のときの衝撃ではなかったか。しかしながらなおこの時点では、このまま日本が平和運動を続けていいたら大変なことになるという意識を持ちながらも、まだふつ切れてない点がある。そういうものを背負いながら、清水さんは六〇年安保に突入していく。

その中で、清水さんについて論ずべき重要な点は徹底した事態の当事者になつたということですね。日夜東奔西走に疲れて、その中で見るべきでないものを見てしまったという体験。ある意味では、ジョージ・オーウェルの体験と同じようなものが、安保批判の会か

ら始まって、清水さんの活動の中にあつたような気がするんですね。そこへ出てきたのが、たとえばトロツキー、ローザ・ルクセンブルグなど従来異端としていたものに対して目を開いていこうということです。現代思想研究会はそういう意味でできたと思うんですね。そして、日本におけるスターリニズムと清水さんの距離がそこで決定的になり、清水さんは思想の問題、あるいは組織論の問題として、そこからテークオフしていく。

一方、ちょうどこの時期に、中ソ論争が起つて社会主義の一枚岩の神話がたがたと崩れゆく。清水さんは、ソ連に対しては、六〇年安保以前から懐疑を持ち始めた。しかしまだ中国は残ってるんです。中国の核実験についての論文では、ソ連の平和共存政策に対して、中国の核の持つ意味に肯定的ですね。実はぼくはこの時点で、清水さんは異和感を感じてました。その後ますます中ソ対立は、深刻なものになっていくわけですね。そのあたりからの清水さんは、いわゆる社会主義というものから決定的に離れていく。そしてそれについて語らなくなります。

そういう意味からしますと、清水さんと

つて、六〇年安保っていうのは、社会主義という体制とイデオロギーに対しても、大きな一つの転換をもたらした経験ではなかったかと思えますがね。

安田 ぼくは反軍国主義者だったんですね。それはマルキシズムも何も関係ないわけですね。気分としての自由主義者だったから。戦中派がなだれを打って共産党に入党した時代がありますけれども、ぼくはついに入党してない。つまり社会体制を、資本主義と社会主義というところでつき詰めて考えてない。それよりもぼくが考えていたのは、天皇制とか、超国家主義、軍国主義と個人の自由、そっちのほうを考えてた。だから、ぼくなりには安保闘争にエネルギーをかけていったのは、あのときの民主が独裁かじゃないけれども、戦争中のような独裁主義が、形を変えてきたらかなわんという、そっちだったんじゃないかしら。

中嶋 その点は、安保の知識人の中でも、清水さんと丸山眞男さんや竹内好さんなんかの大きな違いでしょうね。清水さんの平和論には、民主主義よりも社会主義という神話があつたと思うんですね。だから社会主義がまっ

たくそういうものでなくなってきたときに、その転回は大きかったんじゃないかという気がします。そういう意味で、清水さんにとってもまた日本の戦後にとっても安保は大きかった。と同時に、あのとき安保をどう考えたかという点で、インテリの中に大きな断絶があり、それは今日でも尾を引いてるような気がしますね。

安田 そう思いますね。

中嶋 われわれは教科書に墨を塗った世代です。憲法はまさにグリーンイメージですね。日本が新生していくというイメージ。それが砂川、警職法、勤評という中で、状況がそうではなくなってくる自覚。それはストリートに社会主義が救済になり得るという方向に結びついてゆきましたね。それが崩れていったというところに、われわれの原点があるわけですね。その点で、清水さんと共通項があるような気がする。

安田 ぼくの場合、ああ清水さんとぼくは違うんだなというのは、六〇年安保なんです。いま中嶋さんがおっしゃった意味ともぜんぜん違う。つまり社会主義か資本主義かじゃないか、日本のインテリに対する幻滅感が

あるわけですね。そういう幻滅感の中で、清水幾太郎とも離れていくわけですね。それは何かというところ、日本の近代化っていうものが全部間違っていたんじゃないかっていう疑問です。そうすると、社会主義を選ぶ人、資本主義を選ぶ人、あるいは民主か独裁かっていう選び方すべてに異和感が出てくるわけです。

中嶋 いや、ぼくは六〇年安保以前に清水さんが書かれたのを見ますと、今度『日本人の突破口』を清水さんが出されたこと自体大変な勇気がいることだと思んですが、ここに書かれたことすべて虚ではないかという気がするわけですね。空々しくてとも今日では読めない……

安田 それを虚と言われたら、ものすごく怒る世代があるんですね。虚の中で、それじゃおれたちは万骨か……(笑)

それとね、これはどうですか。清水さんは昭和二十六年『社会心理学』のあとがきで、私は戦後の短かい圧縮された経験を通して、人間を自由かつ理性的な存在に見立てる伝統的な民主主義の信仰は、現実の人間に対する過大の期待であることを学んだと言ってる。

それはいいんですよ。しかし、「戦後の短かい圧縮された経験」っていうのは何かっていうと「なかんずくマスコミ・ユニケーションの機能に関する、また人間が自分のためにつくった集団が、人間を越え、かつ裏切つてゆく事情に関する私自身の直接の経験によるものである」と書いているんです。昭和二十六年ですから、少なくとも六年間の経験の中で、そう言ってるわけですよ。

清水さんは自分が裏切られたというわけですね。中嶋さんは清水さんは傷つきやすい人だっていうけれども、清水さんは、自分のほうが裏切られた、自分のほうが傷ついたというふうにしか自分を限定できない。自分がどれだけの人間を裏切ったか、どれだけの人間を傷つけたかっていうことに対する自覚がもしなかったら、ほんとうの意味でナイーヴじゃないと思っただけですよ。

中嶋 江戸っ子のヤクザっぽさみたいなものが清水さんの開き直りのなかにはある。だが、そのような率直な姿をさらけ出して見せるインテリが日本にほかにいるでしょうか。

安田 そういう次元でもう一ぺん清水幾太郎を論じ直すことができそうですね。